

ほなほ歴史通信

第44号

2007.9.1

ふるさとの山くかつては生活の宝庫く

近年、梅雨や台風等の長びく大雨による山崩れや土石流が、国土の諸処に人的物的被害をもたらし、その地域の人々を生活苦に追いやり、国内の人々に恐怖感を与えている。

大子地方は、東側は久慈山地、西側は八溝山地が走り、これらの山地には八溝山をはじめ大神宮山、花瓶山、稲荷山、南山（以上八溝山地）、生瀬富士、月居山、白木山、男体山（以上久慈山地）などの名の知られた山がある。今までに民家を襲う大きな山崩れなどは見られなかったが、私の身近な人たちの間から、「私たちの周囲の環境は大丈夫なのだろうか」といったささやきが聞かれたのも台風や長引く梅雨のためであった。

日本の国土の面積の約六〇パーセント余は山であり、以前はこの山に見合うだけの緑をもっていた。ところが経済の高度成長に伴う社会の変化は、貴重な山の緑を人々の関心から奪い、特に農村の人たちは、ふるさとの山（雑木山）に関心をもたなくなってしまう。私の知人で茶の栽培を中心に農林業を営んでいるMさん（七三）は、「雑木山ばかりではないですよ。杉山だって採算がとれないのだから関心はないですよ」と、嘆いていた。

かつて、ふるさとの山は林業地帯を形成し、都市への木材を

はじめ、薪、木炭等の燃料の供給地であるとともに、山は生活の豊かな宝庫であった。建築用材や燃料、山菜などを得るだけでなく、山は樹木を育て、水を涵養し、よりよい農耕をもたらす山であったのである。

県下一の高さをもつ八溝山（二〇二二米）は、『続日本後紀』承和三年（八三六）の条に八溝黄金神とあるが、聖なる「金の山」ばかりでなく、田畑を潤す久慈川の水源であり、農耕に必要な水源地をもつ霊山、すなわち水分山でもあった。昔はどんな地域でも、その地域に住む農家の人達は、山を大切に思い手入れをしてきた。杉山は木を伐採したあとには、必ず杉苗を植え、苗木の成長にあわせて、下草刈りや枝打ち、間伐などの手入れをしながら育ててきた。

かつての大子地方は豊かな木材の生産地であり、大子駅周辺や上小川駅周辺等には製材工場が分布し、製材された製品は水戸市をはじめ宇都宮市や東京深川等の木材市場に移出された。また、大子地方は木炭の生産地で農家の副業として盛んに生産された。原木となる櫟（クヌギ）、檜（ナラ）などの雑木は、伐採後およそ十年も経つと成長し再び伐採できるので、薪や木炭等の燃料に利用された。木の葉は堆肥や馬の敷きわらがわりに利用されるとともに、農家にとっては田畑の土壌をよくする大切な肥料であった。

このように、かつてのふるさとの山々は「生活の宝庫」であり、「暮らしを支える山」であったから、農家の人達は、「ゆい」などを行い、ともに支え合いながら、下草刈りや枝打ちなどを定期的に行い、山の管理や手入れを怠らなかつた。しかし、Mさんが嘆くように、経済の発展にともなう社会の変化は、農林業の採算性を低下させ、地域に住む人達の里山への関心を低下させてきている。

（小澤）

漆 掻 き

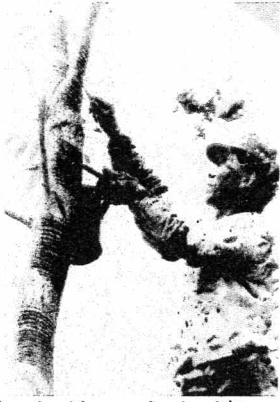
大森政夫

大子地方の漆栽培は藩政時代から盛んに行われた。特に水戸九代藩主斉昭は漆の栽培と採液を奨励し、郡内の農民に苗木を頒布したので、奥久慈地方へも広まった。

その後、明治、大正、昭和期と関係機関が農業の副業として立ち上げようとして、漆栽培組合の設立を図り、漆栽培講習会や、専門講師を招き漆掻実地講習会を開催するなど農家自らが採液することにより収益を高めることを図った。

しかし大子地方の漆は県山林会、郡農会各実行組合の努力にもかかわらず、昭和七年から十年を最盛とし以後は戦時体制のもとで食糧増産が至上命令となり衰退して行った。(大子町史)

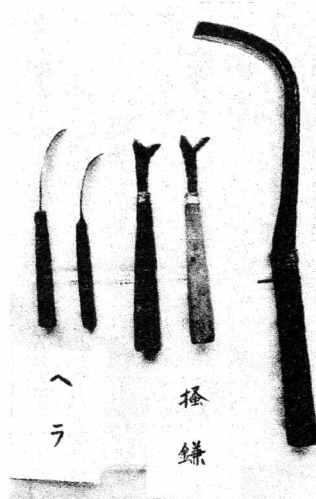
このような経歴の中で、現在漆掻きの技法を伝承してきた人々は町内に五、六人いるという。その中のひとり頃藤在住の安島道男さん(七十七歳)に漆掻きの技法について話を聞いた。



安島さんは、下小川地区の漆掻き人よりその技を伝授され、昭和四十年頃から漆掻きを始め、現在も活躍中である。

最初に行なった場所は袋田地区で、その時の体験を次のように語った。「漆木百本くらいに次々と切り傷をつけて行くのだが、しまいには樹液の匂いがきつくてその場で弁当は食べられなかった。また露出している首筋に樹液が付着し、漆かぶれが生じえらい目であった。」

一、漆掻きで山に入るときはいつも単独行動である。
 腰鎌

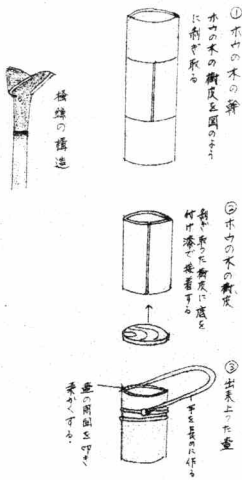


ない用具。福井県地方では「カンナ」と呼んでいる。

・へら 鉄製のへらで、樹皮から樹液を壺に採取するとき使用する。

・壺 採液を入れる携帯用の壺。この壺は手製のもので、

漆掻き用壺の作り方



ホウノキの樹皮を剥ぎ丸めて底を付け、漆液で接着し手綱を着けたもの。壺の縁は叩きつぶして柔らかく、採液しやすくする。

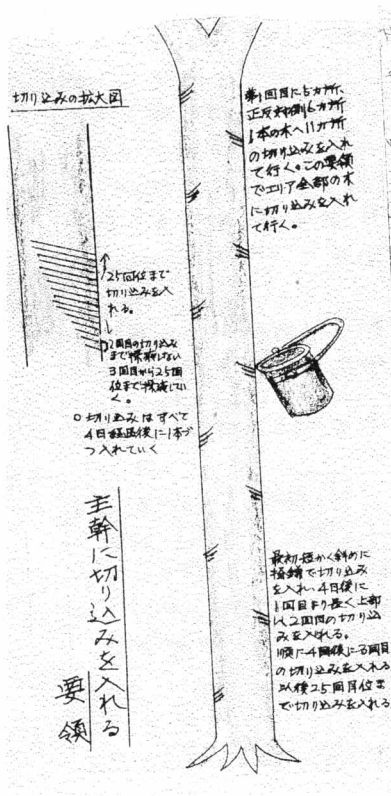
・樽 自宅に専用の樽を常備しておく。山から採液してきた漆液をその都度貯蔵するために使用する。(用具の写真参照)

二、採液の時期

一年を通じ二期にわたり採液する。一期の採液は六月から九月までである。この時期は手の届く高さまでの主幹から採集するので最も多くの採液ができる。漆掻きの最盛期である。

二期は九月下旬から十一月までで、一期で掻いた主幹の上部を梯子をかけて掻く、従って一期より採液は減少する。

三、採液の方法



採液する漆木は樹齢八〜一〇年の成木を対象に行う。仮に百本の漆木を一つのエリアとした場合、まず最初に百本の主幹に搔鎌で短く斜めに切り込みを入れる。

方法は手の届く範囲内の主幹に等間隔に五ヶ所、反対側に入らずに六ヶ所の切り込みを入れてゆく。これで第一回目の切り込み作業は終わり、次のエリアに移動する。(切り込み図参照) 四日後に第一回目に切り込みを入れたエリアに行き、前回切り込みを入れた部分の上部へ、二回目の切り込みを一回目よりやや長く入れる。こうして一回目から二回目(二本の切り込み)までは漆液を採集しない。これは切り込

みを入れることによって樹幹はその部分を再生しようとして、多くの樹液を集中するといわれ、四日後の三回目の切り込みから採集する。

その後四日の間隔で約二十五回(各二十五本の切り込み)にわたり採液するという。つまり一つのエリアに四日間隔で二十五回も足繁く通うことになり、複数のエリアを所有している膨大な労力と時間を費やすことになる。

しかし、農繁期中の農作業や雨の日が続いたりすると漆掻きの作業はできなくなり、自然二十五回の山行きはできなくなる場合があるという。

四、採集した漆液

採集した漆液は凝固しやすいのでその日のうちに自宅に用意してある貯蔵用樽に移し替え、漆液の上に渋紙を張って保管しておく。採液量は一定しないが最盛期に一日一五〇匁(五六三グラム)から二〇〇匁(七五〇グラム)を採取し、シーズンには約一〇貫目(三八キログラム)を採集し、その価格はその都度変動するが、約一〇万円という。大子地方、特に頃藤地区の漆は質が良いと専門家からも評価されていて、各地の漆器製造関係者からの注文も多いが、やはり福井県地方へ宅配便で送ることが主力のようだ。またある程度漆液が採集されると、催促によって随時取引先へ送っている現状だ。

安島さんの漆掻きの行動範囲は、地元頃藤地区が主力であるが、外に西金、袋田、南田気、緒川、御前山地区のエリアを採集して歩くという。



落武者の隠れ里、平畑は石工の里か

中郷の奥、権現堂集落に古い地藏堂ある。ここのお地藏様は台座から円頂まで高さ凡そ二四〇センチとかなり大きく立派な石仏で、蓮華座の下には『女人念佛供養、干時享保十五庚戌、六月吉日施主敬白』とある。享保十五は、七三〇年のこと、実に古いお地藏様である。

さて地元の古老によれば、この権現堂のお地藏様は「昔、平畑にあったのを持ってきた」のだと言う。

平畑（てえらばたけ）とは、中郷の茶味内集落からコグラの峠を越え北吉沢に出て、止屋場の集落から山の峠を越えて、旧高城村の内川に下りる山道の山中にあった集落である。奥州街道の要所で、昔は黒沢小学校の春の遠足では、中郷と北吉沢の子供らはここを往復して矢祭山に行った。

平畑は明治の頃までは戸数六軒を数える集落だったが、昭和の初めには三軒に減り、昭和二十年代にはついに一軒となり、その一軒も昭和四十六年に山を下りて、ここに平畑集落は消滅した。

矢祭町内川に住む鈴木和男さんは最後に残った一軒家の当主で、「電気が入って喜んだのもつかの間、今度は猪に荒らされ山を下りる決断をした。思えば猪に助けられたようなものだ」と笑いながら話していた。鈴木さんによると「応仁の乱の落武者、鈴木監物という武士がここに身を隠し棲んでいた。監物は用心深く常に火箸を首の後ろに入れていた。ある時、追っ手が来て斬りつけられたが首に差し込んだ火箸のお陰で命拾いした。監物は駆け逃げていく敵の追っ手を、井戸端の所から狙って、弓矢をぶっつけたらアシトに当たった。もうちよつとのとこで逃げられてしまった。平畑部落の六軒はみんな鈴木姓で監物の

子孫」だそうだ。

ところで平畑から持ってきたというお地藏様。平畑のどこにあったのか、峠の路傍にあったのか、金銭で購入したのか、幕末から維新にかけての廃仏毀釈で破棄されたものを貰ったのか、それにしても造立の享保年間から三百年近くも経つのに、地藏像はもとより刻字も鮮明で風化してないことから、平畑にあった時も風雨を凌ぐ立派なお堂に入っていたのだろうか。

権現堂のお地藏様と平畑との関係について、内川の鈴木さんや、平畑から北吉沢の大草に嫁にきた星野フミさん、祖母が平畑から来たという高田の益子元一さんにも聞いてみたが、わからないと言う。

そこで平成十九年の四月、権現堂のお地藏様の手がかりを求めて、小学校の矢祭山遠足以来だから実に五十年ぶりに平畑集落跡を訪ねた。林道の開通と時代の流れにより昔の峠道は失われ、一度目は集落跡を発見できず山を下りた。そして二度目の探訪で、突然、目の前に苔むした切石を幾重にも積み上げた石垣が出現、山城のような石垣群にしばし圧倒された。ここが落武者の隠れ里、平畑集落跡である。

何段にもなつた石垣の上は平らな屋敷跡で、自生した竹に混じって庭木だった樗や紅葉、榎の原木がある。道の下の窪地には榎の原木があつて、その根元に井戸端跡がある。「あんな山の上になんか日照りでも涸れず夏は氷のような冷たくてきれいな水が出た。井戸端の中には弘法大師が彫つたという梵字の書かれた石があつた」（星野フミさん）と云う。その弘法大師の石は、今は鈴木さん宅の仏壇の中に大切に保存されている。石は縦二十六センチ、幅十八センチ程の扁平な真石で、水天などを表す梵字が三字、裏には『大寶二壬寅年二月十日、鈴木次良兵衛』とある。大寶二壬寅は奈良時代の七〇二年ではあるが近

世以降の作と思われる。

北吉沢の立路から登ってきた集落の入り口には文化三丙寅（一八〇六）の馬頭観音塔があり、屋敷跡の裏手の切石の階段を登ると石祠が祀られ、また明和三丙戌（一七六六）の地藏真言の石塔などが建っている。

屋敷跡の裏山は急峻な岩山で、何と岩の表面には直線上に一定の間隔で矢穴の痕が数個遺っている。矢穴とは石を割るときにクサビを打つ穴である。城郭を思わせる立派な石垣も土蔵の土台石も切石で、こんな山上にこれだけの石をどんな方法をもって運び上げたのか疑問であったが、鈴木さんが「屋敷の裏山にガラガラした石を切った跡があるのでこれを使ったのだろう」と話していた通りで納得がいった。



さらに裏山を登ると尾根際に、際巨大な岩山があり、風雨を凌げる岩窟と、その上の高い所に灯明形の花頭窓風に彫った岩屋があり、岩を削った階段もある（写真）。この岩窟が、大草の星野さんが話していた「バクチをぶった洞窟」で、灯明形

の岩屋が「平畑部落の氏神である延生の地藏様があった」岩屋である。岩屋は間口七〇センチ、高さ九〇センチで、その中に白と朱で彩色された木造の蓮華座があった。朽ちてはいるが立派な造作である。残念ながら本尊は見当たらない。星野さんによると「子供の頃、風雨でお地藏様が下に転げ落ちるたびに、高い梯子を架けて岩屋に戻した」そうだ。それにしてもよくこんな高い所に岩屋を彫り、集落の守り神を祀ったものだと感心

した。

この岩屋の上は断崖絶壁の尾根で常奥の国堺、ここにも流造りの石祠が、平畑集落を見守るように東を向いて鎮座しているが祠には幣束などもなく、何十年このかたお祭りされた様子はない。集落の山の神なのだろうか。

城郭を思わせる重厚な石垣、精巧に造られた切石の石祠や階段、古いのに刻字が実に鮮明な石塔や石仏、花頭窓風に実に見事に彫った岩屋・・・以上のことから、この応仁の乱の落武者の隠れ里である平畑集落には、その昔、相当レベルの高いブロの石工の存在があったに違いない。

江戸中期以降の墓塔や供養塔、路傍の石仏が大子地方には沢山残っているが、特に平畑に隣村する旧澤又村（北吉沢）には巨大な宝篋印塔や地藏像が多いのも気になる。

さて、中郷権現堂の享保十五庚戌（一七三〇）の立派なお地藏さまであるが、凝灰岩質の石仏で平畑の岩質と類似していることや、旧中郷村とは地理的にも近間だし人的交流もあっただろうから、地元の権現堂に伝えられている通り「平畑から持ってきた」のにほぼ間違いないと思う。

平畑集落の裏山から切り出し加工されて、あの立派な地藏像が造られたのに違いない。馬や櫓で北吉沢の止屋場に下りコグラの峠を越えて中郷の権現堂に持ってきたのだろう。

権現堂のお地藏様は子育て安産の神様として、いつの時代からあげてきたのか着物やハンコ、前掛け、頭巾など数え切れない程に重ね着していて、その信仰の深さを物語っている。

（飯村 尋道）

【昭和の初め頃の農家 四】 炭を焼く

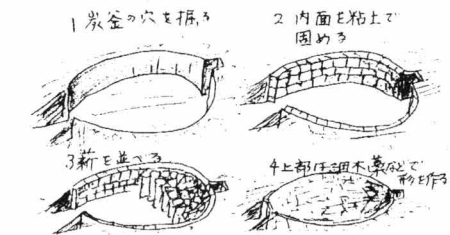
今は家庭の暖房や調理のエネルギーは、ガスや電気あるいは石油が多い。以前は薪や木炭などが主な燃料であった。薪や木炭などは、ガス、電気、石油などに比べて、取り扱いが不便でカロリーも低い。

昔の燃料は、寒冷地の石炭以外は、日本中で薪や木炭が使われていた。木炭は薪よりも軽く、運搬も楽で煙も出ないなどの利点があるから、都会では主に木炭が使われた。木炭は薪を炭窯で焼いて作る。

一、まず炭窯を作る。場所を選んで窯の大きさを決める。次に楕円形ないし馬蹄形に深さ約九〇センチに地面を掘り下げる。内側は粘土を固めて壁を補強する。その内側に薪を立てて並べる。その上に薪や小枝、藁などをかまぼこ型に敷き詰めて炭窯の形を決める。次いでその上に粘土を載せ、一番重要な窯の屋根の部分を作る。この時にしっかりと粘土を搗き固めないと、焼いている途中で粘土の屋根の部分落ちてしまい危険である。粘土の厚さは縁の方は厚く中央付近を薄く、七対五対三くらいの割合にする。

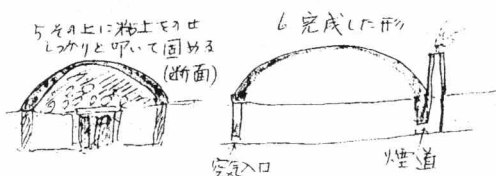
二、こうしてすっかり出来上がると、窯の口のところで火を焚く。薪は殆ど生だからなかなか燃えつかない。半日くらいかかることもある。煙突から白い濃い煙が出る様になると、窯の中の薪に火がついたことが分かるので、窯の口を小さな空気孔を残して閉じる。窯の大きさにもよるが、数日間燃え続けて次第に煙が薄くなり、やがて殆ど見えなくなってしまう。この様子を見て、空気孔と煙突の口を閉

じて密閉する。この後数日間窯の中の火が消えるまで待つ。完全に火が消えた頃を見計らって、



炭出しにかかる。窯の口を開けて炭を取り出す。窯の中はまだ熱く乾燥しているの、灰が口や目に入りづらい作業である。木炭の出来不出来は、いつ窯の口を閉じるかが影響する。早すぎると完全に炭化しない部分が付いていることがある。これは火鉢に炭をおこしたときに煙が出てまじい。遅いと燃えすぎて木炭の量が少なくなってしまう。取り出した木炭は炭俵に詰めて完

成する。
三、木炭の製造は、実は炭を焼く以前の方が大変なのである。山で木を切り倒す事から始まる。多くは山で決められた長さで切りそろえ、窯のある所まで運ぶ。急斜面や道のない所が多く、生木なので機械力の無かった時代は重労働だった。この仕事は容易ではないからと、山中に炭窯を作る事もある。木を切る場所に作るから、重い木を運ぶ必要がなく仕事は楽になる。しかしこの方法はいつ窯の口を閉じるかが問題で、燃え具合によつては、真夜中になることもある。夜中に山まで行って煙の様子を見なければならぬ。重い木を運ぶ苦勞をするか、夜中に山へ行く方を選ぶか、どちらにしてもたいへんであった。



(石井)

歌声ひびく明るい町を目指して(八)

—大子混声合唱団の足跡—

川俣雄司さん。この連載でもたびたびふれたように、選曲、合唱指導、ピアノ伴奏、指揮、作曲を担当した、大子混声合唱団にとってはそれこそ欠かせない人物である。また、合唱団においてだけでなく、生涯を通して音楽と正面から向き合い、格闘し、さまざまな作品を広く世に問い続けた人物でもある。今号は、その川俣さんにスポットを当ててみたい。

本誌第三十六号で述べたように合唱団創設メンバーの一人であった川俣さんは、昭和六十二年(一九八七)九月に亡くなられている。五十二歳という若さでの、惜しまれる死であった。その三年後の平成二年十一月二十五日、水戸市の県民文化センター小ホールで「作曲家『杉百郎の世界』 川俣雄司・追悼コンサート 歌とピアノの夕べ」が催された。当日のプログラム(大内智子氏所蔵)によると、コンサートは二部構成で、「第一部 前期〜中期の作品」では歌曲八作品が、「第二部 中期〜晩年の作品」ではピアノ曲六作品、童謡十六作品、遺作「子供うかい音頭」等が県内で活躍する六人の音楽家達によって演奏されている。杉百郎とは、川俣さんのペンネームである。

川俣さんは、大子一高を卒業後音楽の専門学校で学ぶことはなく独学が基本ではあったが、先のプログラムに記された「作曲家『杉百郎』プロフィール」によると、今村まさる、有馬礼子、高橋八郎、平岡均之氏らに師事していたようである。どのようなきっかけで師弟関係を結んだのかは不明だが、これら専門家から薫陶を受けながらも、東京から遠く離れた山間の地大子で、一人の作曲家として身を立っていくための努力は並大抵

のものではなかったらうと思われる。

そうした努力のなから生まれた作品群は、童謡、歌曲、ピアノ曲、管弦楽曲、箏曲といった広い範囲に及んだ(神長貞行氏談)。とくに力を注いだのが童謡である。金の鳥音楽協会(今村まさる会長)に所属して定期的に発表したほか、昭和四十六年には、一〇年間に発表してきた子供の歌の中から比較的好評だった作品、三七曲をえらび季節的に配列した「作品集『現代日本子供の歌』」を出版している。手がけた童謡の数は、「およそ百曲は越えている」(前掲「プログラム」といわれる)。

青年時代に精力的に取り組んだのが歌曲の分野であり、その代表作品が「駒市」である。これは、毎日新聞社主催の第七回声楽曲作曲コンクール(昭和三十五年)において入選した二十曲の一つに選ばれている。同年一月二十七日、東京銀座の山葉ホールで入選作品発表演奏会が行われた(同年一月十七日付毎日新聞)。当時川俣さんは弱冠二十四歳、この入選は、作曲家としての地位を決定づけるものになったという(前掲「プログラム」)。

また、合唱団のメンバーである友人の池田数和さんとは民謡の採譜活動を行っている。動機は、「地域文化が消えていく、後世に残すためには楽譜にすべきだ」(池田さん談)。二人は、オーブリーールの録音機を担いで大子町内をめぐり、草刈唄や茶もみ唄を録音した。しかし、録音はしても採譜は容易ではなかった。池田さんによると、ピアノ伴奏付きで唯一完成したのが草刈唄であった。この楽譜は、昭和三十八年九月五日に川俣雄司総合音楽研究所から非売品として発行されている。翌三十九年二月七日、池田さんは、勝田市(現ひたちなか市)の勝田一中で開かれた第十八回のだ自慢全国コンクール茨城県大会歌曲の部で、この草刈唄を歌った。二位に入賞したという。

その他川俣さんには、委嘱を受けて作った作品も多数ある。校歌や会歌がそれで、例えば依上小学校校歌、袋田フルーツパーク音頭、奥久慈植物研究友の会会歌、そして合唱団団歌「うたいましようごいっしょに」等が挙げられる。

こうした川俣作品に共通する特徴は何だろうか。作曲活動の傍らカワマタ音楽教室を経営していたことは本誌第三十六号で述べたが、二年間その教室に通い、後に東京音楽大学を卒業してから同教室に講師として勤め、現在は大子町内で音楽教室「ブルスカ」を主宰している神長貞行さんは、現代音楽の作曲家の立場から次のように述べている。「シンプルと斬新の融合」だ、と。とくに童謡については歌いやすく、聞きやすく、覚えやすい一方で、短い曲のなかに何らかの新鮮さがほどこされている。例えば、四分の二拍子で始まった曲が途中から四分の四拍子に変わる、長調から短調に転調して終わる、普通では予想できない和音が意識的に挿入されている等の斬新さが感じられる、と。前述した追悼コンサートで、歌曲二曲と童謡九曲を歌ったソプラノ歌手の大内智子さんは、単純で誰もが口ずさんで歌えるし、郷愁を感じさせる典型的な日本の曲だ、と。もう一人、ピアノの指導法についてよく議論をし、「川俣さんは私の弟分」だという作曲家の黒沢日出男さんは、「日本人が昔からもっている心を大事にしたいという気持ち」をベースにして、メロディは素朴で親しみやすい、懐かしい感じがする、と。奇しくも、三人の専門家の評価は一致している。五十二年間という決して長くはない生涯で、川俣さんは多くの優れた作品を残されたことであろう。亡くなられてから二十年、追悼コンサートが行われてから間もなく十七年が経過する。残念ながら、現在、川俣作品は埋もれたままの状態である。(齋藤)

編集後記

大子町町史編纂事業において、発刊した本の中に大子町史料別冊(9)『西国順礼道中記』があります。これは、文化九年(一八一二)一月四日から四月四日までの正味八十七日に渡り、当時の高柴村の益子廣三郎が同志の三名と共に西国順礼の途次、伊勢神宮と、讃岐の金比羅参りを行った際の道中記を、後続者のための手引書として記録したものです。

この本を国立国会図書館で見たNHKのディレクターが、教育テレビで取り上げたいと先日取材に訪れました。「庶民のこの種の道中記としてはかなり詳しく、単なる参詣記ではなく、歴史、民俗、地理、文化等の分野にわたって参考となる点が多くなくない。当時の庶民文化の水準をうかがうこともできる」と話されました。八月三十一日には現地撮影に来町の予定です。教育テレビの十月各木曜日、午後十時二十五分からの「知るを楽しむ・歴史に好奇心」の番組の中で放送されますので、ぜひ御覧ください。(鈴木徹)

編集人 齋藤 典生(茨城大学人文学部)

野内 正美(茨城県立大子清流高校)

石井喜志夫(元 教員)

小澤 圀彦(元 教員)

鈴木 徹(大子町教育委員会)

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付

久慈郡大子町池田二六六番地

〒319-3551 ☎0295(72) 2627